

太陽の世界

1 聖双生児

半村 良



角川文庫

太陽の世界 1

はんむらりよう
半村 良



角川文庫 5429

昭和五十八年六月十日 初版発行
昭和五十九年八月三十日 再版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一三—三

編集部(〇三)二三八—八四五—
電話 営業部(〇三)二三八—八五二—

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——大日本印刷 製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

太陽の世界1

聖双生児

半村 良



遠い昔、ムーと呼ばれる大陸があった。ムーは海中に没した。

カラー口絵
本文イラスト

磯野宏夫

象形文字

横尾忠則

第一章

1

風が咆え、雷鳴が轟く。青白い一瞬の光の中に、押し寄せる雲の不気味な姿が現われては消える。

手に触れる岩はことごとく冷やかに濡れ、闇はすぐ近くににいる者の気配すら感じさせぬ程底深い。

男も女も、老いも若きも、今はただ身をすくめてその闇の中にうづくまり、吐く息を細くして、じっと朝を待つばかりである。

「族長よ」

風と闇の中で男の声がした。

「何だ」

「この道でよかったのでしょうか」

族長はすぐには答えず、尋ねた男も沈黙を守った。風が咆え、雷鳴が轟き、青白い一瞬の光の中に族長の逞しいうしろ姿が現われて消えた。

「我らは今、渦巻く雲の中にいる。底深い夜の闇にとざされている。この道が果して正しいかどうか、誰に判ろう。ただ儂は自分を信ずるのみだ。儂は儂にこの道を選ばせた者を信じ、儂を信じた八百の人々を信じ、そして祈る」

雷鳴がやや間遠になったようだった。しかし闇はますます濃く、風は一層激しく咆えた。乳呑み児は母親の胸にすがって泣声さえたてず、子供たちは老人に囲まれて互いに寄り添っていた。

族長はその闇の中で言う。

「見よ。我らの行手をはばんだ岩々が、今は風から我らを守ってくれている。この世に我らの友ならざる者がいようか」

その声は呟きに近く、すぐそばにうづくまる者にも、風の音にかき消されてよく聞きとれなかったようだ。

風はそれから何時間も吹き続け、やがて徐々に静まりはじめた。人々はそここの岩の間に身を寄せ合って眠り、そして太陽の光を感じて目ざめた。

族長はすでに岩の上に登って体を東に向けていた。それに見ならつて、人々は次々に岩に登り、東の空を眺めた。

雲はまだ彼らの足下にあり、波立つ雲海の涯に、黄金色の光があった。

その光は雲海の上をはしって彼らに突きささり、砕けて彼らを黄金色に染めた。やがて雲

海も薄桃色に染まり、太陽はゆらめきながら黄金の色から火の色へと移って行った。

「族長よ」

一人が昇る太陽のやや右を指さして言った。

「あそこにも山が見えます」

遙か彼方に、雲海から鋭く突き出して黄金色に染まる山塊があった。

「儼はあの山をめあてにして来たのだ」

族長はそう言うと言杖をにかけて足下の雲海を示した。

「あの遠い山まで、この厚い雲を破るものは何も見えぬ。この雲の下へ行こう」

人々はそれを合図のように、首にかけた袋から乾肉をとり出して噛み、筒骨の栓をとって水を飲んだ。

族長を先頭に人々が山を下りはじめたとき、太陽は空に昇り切って、濡れた黒い岩肌を明るく照らしていた。

彼らは南北に長く連なった山脈の西側から来て、いま東側の斜面を下ろうとしているのである。とほうもなく高い嶺々が続き、雪と氷にとざされたその山脈を越えて東側の土地へ行った者は、一人もいないと言われている。

昔から、山の向こうには優しい大地がひらけていると言いつた者がいたが、それをたしかめるすべはなかった。時には山脈の向こうへ行こうと、実際に登って行った者もいたよう

だが、果して行きつけたのか、それとも途中で死んでしまったのか、そのとほうもなく高く険しい山脈に挑んだ者は、二度と再び戻っては来なかったのである。

また、山脈の向こうは、優しい大地どころか、ありとあらゆる邪悪なけものが棲む恐ろしい場所だとも言い伝えられていた。

しかし、そのどちらにもせよ、いま八百人もの集団が、氷と雪にとざされ、息することさえ困難な山脈の尾根を越え、東側の斜面の雪のないところまで辿りついたのである。

優しい大地にせよ、邪悪なけものの棲む場所にせよ、山脈を越えた彼らには再び元の土地へ帰る力はなかった。今はただ雲海の下の世界をおのが世界とするのみである。

族長の持つ長い杖は、先頭に立って一族を導く為の目じるしであった。その杖が動き、一族の長い列も動きはじめた。険しい岩山の巨岩の間を縫って、人々はゆっくりと用心深く下って行く。

だが、彼らが這いおりている山は余りにも高く、余りにも巨大であった。その険しさは、その八百人もの一族がよじ登り、登り越えて来たとはとうてい信じられない程である。山のどこかからわき出して、こぼれ落ちているところだと言ったほうがまだ信じ易いかも知れない。また仮りに、その高く険しい山脈を越えて来た者であることを信じたとしても、無事に越えられた彼らの幸運に驚くより、越える為に登りはじめた時の決断と、それに挑みかかった底知れぬ勇気をまず信じかねるであろう。

彼らが身にまもっているものは、カハの木じゆひの樹皮たわを叩いて作った、黄色味を帯びた布であった。女はそれを二重にし、下は長く踵かかとに届くほど、上は膝頭ひざごしらの辺りまでにして巻きつけている。そして更に同じカハの布を腰骨の辺りから乳の下あたりへまで、ぐるぐると巻きつけていた。雪と氷の世界へ挑む為、上半身にはみな毛皮をつけて寒さから身を守っているが、本来は腰布と帯だけが彼女たちの服装なのである。

男たちはまずカハの布ふんどしの褌ふんどしをして、その上に女たちの上腰布と同じものをつけている。上半身にはやはり毛皮をまもっているが、今はみな跣はだしである。平地では皮のサンダルをはいたりもするのだが、危険な山越えでそんなものをまだはいている者は一人もいなくなっている。男の子たちの服装は年齢によって分れている。六歳までは二重の腰布と長い帯を巻いて女と同じみなりだが、七歳になると褌と短い腰布に変わる。

老若男女を問わず、みな首から紐ひもで吊つるした袋を持っているが、その袋の形はまちまちである。女たちの中には、筒骨がほを何本も帯に吊して、歩くたびに乾いた音をたてさせている者もいた。一族は族長を先頭に幾つもの小集団に分れていて、そうした女たちは仲間の予備の食糧や水を持っているのだ。

男はみな同じような長さの短髪で、女たちはまっすぐな髪をうしろで束ね、そのまま背へたらしめている。未婚の女は後頭部の上のほうできつく束ね、既婚の女は下のほうでゆるく束ねるのがならわしであった。

彼らの服装が長く困難な旅にもかかわらず、さして乱れたように見えなかったのは、宗教的な戒律かいりつのせいであつた。無形の神「ラ」は、いついかなる所でも彼らの行ないを見守っており、「ラ」を畏おそれる者は常に行ないを正し、すがすがしくあらねばならなかったのだ。

彼らはあるとあらゆるものに「ラ」を感じていた。天にはソラがあり、野にはハラがあつた。貴重な物はタカラであり、聖なる場所はテラである。住む場所にはムラ、柔かいしとねにはワラが宿っている。

ラ・ムー。彼らは今、「ラ」が教えた理想の大地へ向かつて下っているのだつた。

2

数日後。

厚い雲が消えて青空が見えていた。族長は高い岩の上に立つて、凝然ぎやうぜんと眼下にひろがる景色を眺めていた。

「族長おさむよ」

一段下の岩角にたたずむ杖を持った老人が語りかけた。その老人は族長の父の弟で、これまでもその豊かな知恵で族長を扶たすけ、たびたび一族の危難を救つて来ている。

族長は左下に首をまげて老人を見た。人々はずっと離れた所で小休止している。

「どうやらここは違うようです」

老人はいたわりをこめた声で言った。族長は顔を正面に戻してまた眼下の世界を見た。その景色は緑一色である。いや、緑と言うにしてもそれはあまりにも濃く、くろぐろと硬い感じであった。

「密林だ。うはここへ一族を導けと言うのか」

族長はそう呟いた。その声にもその姿にも、疲労と孤独のかげりが濃かった。

「砂漠よりはましでしょう」

老人が言う。

「密林には食べられる木の実はあろうし、獣も多からう。飲む水もある」

「しかし」

族長は右手に持った杖をそのままに、左手をあげてくろぐろとひろがる大密林を指さした。「この見渡す限りの密林には毒虫も多からう。食べれば死ぬかも知れぬ毒を持った木の実は生っている。凶悪な猛獣も多からうし、悪い病もひそんでいる。ここには住めぬ」

「族長よ。我らは寒さと餓えと渇きに耐え、その上息苦しさとまでたたかかって、やっとここまで辿りついたのです。我らは休まねばなりません。とにかく下り続けましょう」

老人に言われ、族長はかすかに頷いた。そうするしか方法がないことは、彼にもよく判っていたのだ。

「下から風が吹きあげて来る。暖かい風だ」

老人は励ますように言った。

「この風は久しぶりですね」

「トマピよ」

族長は叔父に言った。

「行列の順序を変えて、男の半分を先頭に出してくれ」

「はい」

トマピは深く頷くと、老いの身にしてはひどく身軽に岩をとびおり、小休止している一族のほうへ去って行った。

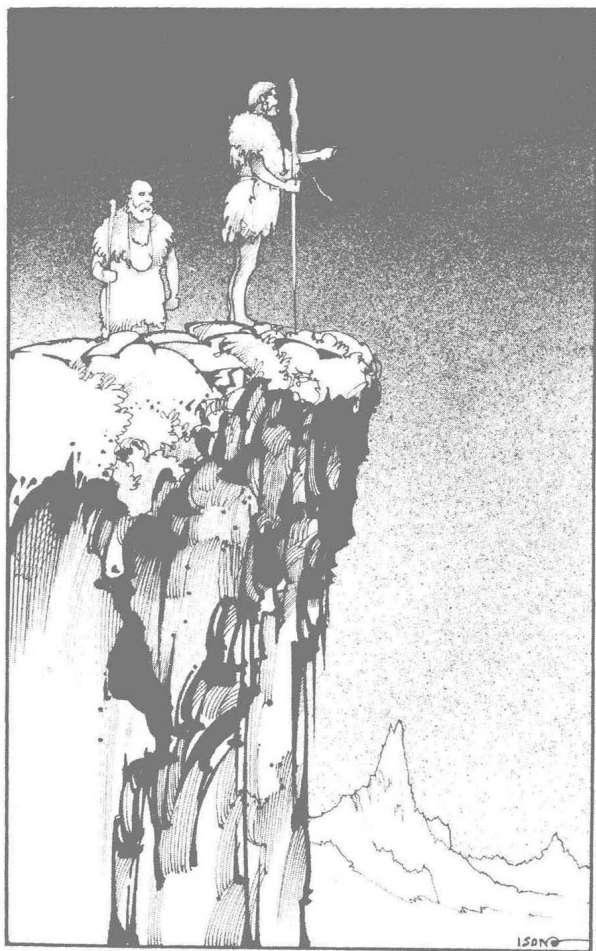
斜面はすでにかなりなだらかになっていた。樹海のそばまで行き着くには、あと一日もあればいいだろう。

族長ならずとも、一族の長い旅はそこでおわりであって欲しかった。伝説の優しい大地がそこにひろがっていて欲しかった。しかし実際に彼らの行手に待っていたものは、今まで誰も見たことがないような大樹海であったのだ。

族長にはその樹海から吹きあげて来る、久し振りの暖かい風さえもが、何か不吉なもの前触れであるかのように感じられたようだ。

「この世に我らの友ならざるはなし」

族長はおのれを励ます為にそう言い、岩をおりた。



「密林マヨシの入口のあたりに安全な場所を見つけて、しばらく一族を休息させることだ」
族長はそう呟きながら行列の先頭へ戻った。

「アムの息子キムたちよ」

やがて族長は集合をおえた男たちに言った。彼ら一族は自分たちをアムと呼んでいた。遠い祖先の名にあやかっているのである。

「あの密林マヨシは未知の世界だ。果してそこがラの教えた場所かどうかはまだ判らない。警戒を厳重にして未知のものに備えよ。密林マヨシが我らの友であると判るまで、みだりにそこへ入ってはいけない。しかし、密林マヨシには木の実ツクリもあるろう。獣チカも多かるう。飲む水もある筈だ。密林マヨシのそばに仮りの家を作り、しばらくはそこに住んで力をつけよう。たとえ密林マヨシが我らの真の友でなくとも、密林マヨシの外にいる限り友となってくれよう」

族長の叔父トマビ老人は、そう言う族長をみつめて満足そうに頷いていた。

「そしてアムの息子キムたちよ」

族長は長い杖をあげて、彼らの背後にのしかかるようにそびえたっている山を示した。

「振り返って山シタを見るがいい」

男たちはみな首をめぐらせて山シタを仰あおいだ。それを見て、後方の人々も同じように山を振り仰あおいだ。

「この険しい山シタを、この高くそびえる山シタを、この何人なにびとも越えたことのない山シタを、我らは見

事に越えて来た。この山を越えるとき、雪や氷の為に一族の誰かが死んだか」

「否」

「岩からすべり落ちて死んだ者がいるか」

「否」

男たちは声を揃えて答えた。

「臆して途中から引き返した者はいるか」

「否」

「越えられる筈はないと諦めていた者はいるか」

「否」

「ラを信じ、無事に越えられると信じて疑わなかった者はいるか」

「諾……諾……諾……」

男たちの力強い合唱が後方の人々にも伝わって行き、一族は声を揃えて諾と叫び続けた。

「さればアムの息子たちよ」

族長は両手を高くあげ、声を大きくして言った。

「山を下ろう。密林のほとりで憩おう」

「諾」

山を下る一族の行列は活気づいた。忍耐強く、団結の堅いことで知られたアムの人々と